

---

# シャドーイングを取り入れた小学校英語科授業の実践

小貫 優嘉

(児童生徒支援コース 12502001)

---

## I はじめに

### 1 研究の目的

本研究では、これまで外国語活動で主に行われてきたゲームや歌、チャンツにとらわれず、誰でも負担感なく取り組める音声教材を活用した授業の一提案として、シャドーイングと英語劇づくりを授業に取り入れながら児童の変容をみとることを目的とする。

### 2 研究の背景

小学校学習指導要領解説外国語活動編によると、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」とある。外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるために、ゲームや簡単な歌、チャンツを手立てとして教える場合が多い。しかし、金森(2011)は、聞く活動の工夫と重要性を述べている。「聞く活動」をメインにした活動を提案する必要があることがわかる。

そこで、本研究では、主に通訳者の語学学習方法として確立されているシャドーイングを取り入れることで、授業内で児童が十分に英語に触れる時間を確保し、英語のインプットを促す。シャドーイングとは、玉井(2008)によると「すでに持っている言葉の知識を、聞くと同時に繰り返すという運動と結びつけることによって活性化し、聞く力と発話表現力を同時に伸ばそうとするトレーニング法」である。その利点については後述する。

さらに、シャドーイングで身につけた英語をアウトプットするために、シャドーイングを用いてセリフの暗記や発音練習をし、活用場面として英語劇づくりに取り組むことも意図的に設定して研究を進める。

## II 準備

### 1 シャドーイングについて

#### (1) シャドーイングの利点

玉井(1992)によると、リスニングの中下位者にとって効果的であること、また短期間で効果が出やすい方法であることを述べている。児童の達成感に繋がりやすく、英語リスニングの経験が少ない小学生に適した練習方法であると言える。

また、萩原(2007)によれば、「モデル音声をよく聞いて、その高低に注意してシャドーイングをする」というように注意点だけ伝えておけば、教師が手取り足取り発音指導しなくても学習者は自分でどんどんシャドーイングを行い自らアクセントを身につけることができる。」としている。これは、小学校教師の負担軽減に繋がるといえる。

シャドーイングは、聞くとほぼ同時に発音しなければならないので、個々で音声を聞き

ながら発音をすることが一般的な練習方法である。小学校でもパソコン室などの活用により、実現可能な練習方法である。このように個人練習のスタイルを確保することで、他の児童の声に邪魔されず、集中して音声を聞くことができる。聞くことと話すことを同時に行っており、時間を有効に使える学習方法である。

## (2) シャドーイング指導上の留意点

門田(2011)は、「一般にシャドーイング学習の当初は、シャドーイングがまったく自動化していない、むしろかなり認知負荷が掛かった状態である」とし、「同じ言語材料のシャドーイングを繰り返すことで、また異なる言語材料のシャドーイングをさらに繰り返すことで、だんだんとシャドーイングがづらい作業ではなくなっていく」と述べている。したがって、シャドーイングの練習自体はもちろんのこと、繰り返し学習できる教材の導入が効果的であると考えられる。しかし、「同じ素材でのシャドーイングの再生率は5回までは向上するが、それ以上はあまり伸びが見られない。」ともあり、教材研究は児童の実態を分析し適宜検討・改善しながら行う。

## 2 英語劇づくりについて

佐野(1990)は、英語劇づくりについて次の8項目を主な利点としてあげている。児童の実態に合わせて、各項目の達成を目指す。

(1) コミュニケーションに関わる心理的要因を強化する
(2) 「聞く」「話す」活動として優れている
(3) 非言語的手段と結び付けて英語を理解し表現する
(4) 場面や文脈のなかで英語を理解し表現する
(5) 英語での自己表現力を伸ばす
(6) 楽しみながら英語を学ぶことができる
(7) 生徒に英語学習の目的意識と成功観を与える
(8) 英語劇はAETとの共同作業の絶好の機会

また、カンドン(1978)によると、「子どもに自分が言っている言葉の内容をはっきり理解させることが重要である」と述べられている。英語の意味がわからなくても暗記はできるが、言語活動にならないからである。カンドン(1978)は発表形態について独自の定義づけもしている。服装、舞台装置などほとんど考慮せず

に随時教室内で行うことを「Platform play」、それらを考慮したものを「Stage play」と呼び、「上演の仕方は自由に発想しても英語劇として成り立つ」としている。例えば、人形劇や影絵にしてもよい事と考える。本研究でも、こうした多様な発表形態に関する考えをもとに、児童の実態に応じた英語劇づくりを行っていく。

「外国語活動の目標と達成のための留意事項(群馬県教育委員会、2011)」では、「音声を中心とした指導の充実」と「コミュニケーション体験の充実」の2つの必要性が述べられており、以上のようなシャドーイングと英語劇の特徴をふまえると、両者を組み合わせる授業作りをしていくことが、この2つの充実を達成することに適していると言える。

## 3 実践計画

以上をふまえて、シャドーイング学習は、1ヶ月に1教材を目安に進める。英語に慣れるためのツールとして練習を行い、音声教材をもとに発音しているかを評価する。児童が再現した発音が英語として正しいか否かよりも、その児童が聞こえたように声を出すことができ、少しずつイントネーションなど身に付けていけばよいこととする。

実習校での英語の授業は週1時間であり、45分間のうち15分程度をシャドーイング練

習時間にあてることとする。実習校のパソコン室の児童用パソコンにはヘッドセットが付いており、1人ひとりがヘッドセットを付けた上でシャドーイングをすることが可能であるため、シャドーイングをする際は、パソコン室で授業を行う。

本研究では、シャドーイング練習を基礎期・強化期・活用期の三段階に設定する。内容は、実習校の学習活動とシャドーイングを並行して行い、それぞれの目標を設定した。



基礎期は次単元の学習活動で使われる会話文を使用することで、シャドーイングに慣れさせることを目的とする。英語を読むことに慣れていない児童の負担にならないよう、また、集中して聞き、発音することに慣れさせるため、文字媒体の資料は児童に渡さず、音声教材だけでシャドーイングをする。難しさを感じる児童には、声を無理に出させず、聞くことに集中させるようにする。

強化期では、基礎期の学習活動とシャドーイング練習を通して身に付けた、児童の既習体験を生かせる教材、繰り返しの多い教材を設定するようにする。児童の変容に応じて難易度を合わせ、集中力や英語の長文のイントネーションを身につけさせることを目的とした教材を扱う。内容の難易度が上がるため、日本語も含めた文字教材も配布し、内容理解を促す。これは英語を読むことや、日本語の意味と結び付けることに意欲を高めることにも繋がる。

活用期は、これまでのシャドーイングの成果を生かせるよう、児童の能力に応じた成果発表にむけて英語劇づくりを行う。2で述べた英語劇づくりの特徴をふまえた上で、児童の実態やシャドーイングの達成状況に応じて随時教材を決めていく。

いずれの段階でも、単調な反復練習だけにならないよう、導入時に単語の意味と発音をフラッシュカードで確認したり、実際の会話を実演したり、リピート練習も適宜入れるようにする。シャドーイング練習後は、単元に関する単語の学習やゲームを行う。

評価のために、授業実践前と実践後にアンケートを実施する。さらに毎授業後に児童に感想を自由記述させることで、意欲面についての変容をみとる。行動面については、実際の指導場面での観察と、ビデオでの録画をして実態を把握する。

### III 実践

#### 1 児童の実態

事前アンケートから、クラスの児童（第5学年、27名）は外国語の授業においてゲームの楽しさを目的とするのではなく、英語を身につけようとする意欲があると考えられる。

#### 2 実践の概要

児童は2学期に入り、市指定単元「クイズ大会をしよう」(What's this? Where is this? Who is this?) や、「英語で買い物をしよう」(May I help you? I want~. How much? ~dollars.)、「時間割をつくろう」(I study~ on~.)、「できることを言ってみよう」(Can you play ~? Yes, I can. / No, I can't.) に取り組むことと並行しながら、シャドーイング学習を行った。

### 3 実践の具体例

**基礎期**では、実習校の学習活動「英語で買い物をしよう」と関わりを持たせた「簡単な買い物の会話文 (ALT と授業者によるオリジナル音声教材)」でシャドーイングを行った。また、市指定教材の一つであるフォニックスソングを取り入れ、アルファベットと発音を関連づけられるようにした。

**強化期**では、導入の際にシャドーイングの目的について改めて説明し、児童の意欲を高めた。児童にとっては日本語で馴染みがあり、繰り返し表現も多い「おおきなかぶ」の英訳版 “The Gigantic Turnip(R.I.C PUBLICATIONS、2004)” (以下「おおきなかぶ絵本バージョン」とする) を教材とした。ナレーションで構成されている物語形式で、付属 CD の再生スピードも速く、基礎期より難易度の高い教材に挑戦することで一層英語に対する興味関心を高めることができた。

**活用期**では、これまで親しんできた会話のシャドーイングや、物語「おおきなかぶ」の内容を更に理解し、聞いた英語を単に真似をするだけでなく、体の動きや声色、表情を自分で考え表現することを身に付けさせるために、「おおきなかぶ」の英語劇づくりに取り組んだ。強化期で扱った「おおきなかぶ絵本バージョン」と、英語ノート 2 (文部科学省) 「Lesson8 オリジナルの劇をつくろう」(p.50~55) (以下「おおきなかぶ劇バージョン」とする) を適宜組み合わせることで、児童に合わせた台本を作成した。1人1冊台本を配布し、台本には日本語訳を掲載せず、意味は体を動かす練習をする際に、口頭で説明するようにした。

「セリフの言い方ワークシート」を作成し、自分の役の「速さ、声の高さ」について注目させてシャドーイングさせ、それを元に児童の役作りをさせた。1時間毎に目標が達成できたかを評価し、演技に反映させるようにした。また、児童の役作りの一貫として、筆者が登場人物に相応しい小物や洋服を用意し、練習や本番で着用させた。

## IV 考察

### 1 児童の意識について

意識面についての事後アンケートによると、2学期の授業全体に関する項目からは、楽しくできたと感じる児童が多かったことが分かり、ゲーム、シャドーイング、歌などさまざまな学習の手だてにより一層興味を持って取り組むことができたことが分かった。

### 2 授業者による評価

児童の「セリフの言い方ワークシート」をもとに、声の高さ、速さに着目して児童の発表の様子を観察すると、多くの児童がおおむね達成できていた。具体的なセリフの言い方の目標を設定させ、毎時確認させることで、具体性を持って役作りに取り組むことができた。セリフを暗記することに関しては、不十分である児童もいたが、班の他の児童がヒントを出したり、セリフ自体をそのまま教えたりする事で劇を進行することができた。

### 3 各活動の留意点について

基礎期では、シャドーイングを生かした活動をする際は、意味確認と発音を改めて練習し、インプットからアウトプットへの移行ができるようにする必要があることが分かった。

強化期では、指導前に目的を伝え、具体的な目標を立てさせることで児童の意欲が高まることがわかった。扱う教材は児童になじみのある教材を用い、内容理解の負担を減らす

ことが必要である。

活用期では、「セリフの言い方ワークシート」を作成したことで、音声教材（お手本）と自分が目指すセリフの言い方の違いを明確にすることができ、実際の発表でも児童によるセリフの言い方の違いを見ることができた。登場人物が多い会話や物語の音声教材も、児童が飽きることなく学習するのに効果的と言えよう。

また、全体に言えることとして、指導の際は、高学年であれば、文字への関心も高く、文字教材（英文、日本語訳）も一緒に扱うことで自主的に読もうとする姿勢がみられ、内容理解がさらに深まると言えよう。

## V 研究の成果と課題

### 1 成果

小学校でのシャドーイングを取り入れた授業実践が可能であることがわかった。練習は基礎期・強化期・活用期に分けることで学習のねらいを明確にし、児童の実態に合った授業を実施することができた。基礎期では、実習校の学習活動と結びつけることで無理なくシャドーイングに慣れることができた。強化期では、基礎期で学習したことを基に、難易度の高い音声教材に取り組むことで授業への意欲が高まった。さらに活用期における英語劇の練習と発表を組み合わせることで、正しい発音の習得とコミュニケーション活動の体験ができた。英語劇づくりを通して、文脈を理解し、自信を持って発音できるようになった。また発表に向けて、目的を持って授業に取り組むことができた。

### 2 課題

誰でも負担感なく取り組める授業の一提案として授業を行ってきたが、シャドーイングだけで児童が十分に英語を理解することは難しく、教師がゆっくりと発音したものをリピートさせたり、フラッシュカードで単語の意味を確認させたりするなど教材や授業の進め方の更なる工夫が必要である。また、本実践では基礎期・強化期・活用期の3期にわけたが、3期それぞれの内容設定や内容の配分についてもさらに検討が必要であろう。今後もシャドーイングを取り入れた授業実践を積み重ね、合理的かつ児童の意欲向上に繋がる外国語活動の授業デザインの一手法としてシャドーイングが有効であること示していきたいと考える。

#### (主な参考文献)

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東洋館出版

群馬県教育委員会(2011)「外国語活動の目標と達成のための留意事項」『外国語活動の手引き～5つの課題とその解決に向けて』群馬県教育委員会

金森強(2011)『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣—うまくいかないには理由(わけ)がある—』成美堂

門田修平(2011)「インプットをアウトプットにつなぐシャドーイング：理論と実践の連携」『JACET 中部支部紀要 (9)』p41-55. 社団法人大学英語教育学会

玉井健(2008)『決定版 英語シャドーイング超入門』コスモビア

文部科学省(2009)『英語ノート2』教育出版

玉井健(2005)『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房

A.トルストイ原作、内田莉沙子日本語訳、ピーター・ハウレット リチャード・マクナマラ英訳(2004)『The Gigantic Turnip』R.I.C PUBLICATIONS

佐野正之編著(1990)『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部

キャミー・カンドン(1978)『小・中学生のやさしい英語劇』評論社

佐野正之(1977)『英語劇のすすめ』大修館書店

元広島大学広島女高師附属学校英語科教官(1959)『英語劇—指導とテキスト—』堀書店